



橋 菓 祖
橋本神社



〒649-0144 海草郡
和歌山県海草郡
下津町橋本125番地

きつもと

橋本神社社務所

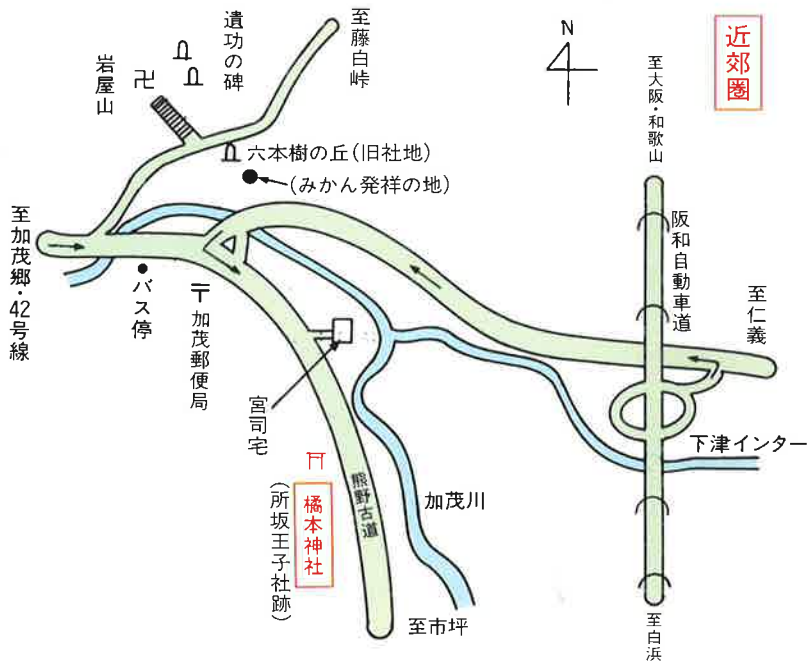
電話 0734-94-0083番
FAX 0734-94-0949番
振替 00960-8-19543番



大阪方面よりの順路

参拝順路

JR紀勢線加茂郷駅下車、東3.5km
JR紀勢線海南駅下車南へタクシー10分
R42号線下津町小南交差点、東へ3km
阪和自動車道下津インターより西へ500m



近郊圏

御祭神

田道間守神

(多遲麻毛理神)

熊野坐大神

(家都御子大神)

境内社

天照皇大神 || 里神社
 素戔嗚尊 || 小殿社
 宇須女命 || 女郎子神社
 菅原道真 || 天満宮
 破軍星 || 妙見神社
 迦具土神 || 秋葉神社

主な祭典

大祭

四月三日 春祭・菓子祭
 全国銘菓奉獻祭
 十月十日 例大祭・みかん祭

中祭

一月一日 歳旦祭
 二月一日 神火祭
 六月三十日 大祓式
 七月十五日 夏祭
 九月十五日 敬老寿祭
 十一月十五日 七五三祭

みかんと菓子の祖神「田道間守公肖像」

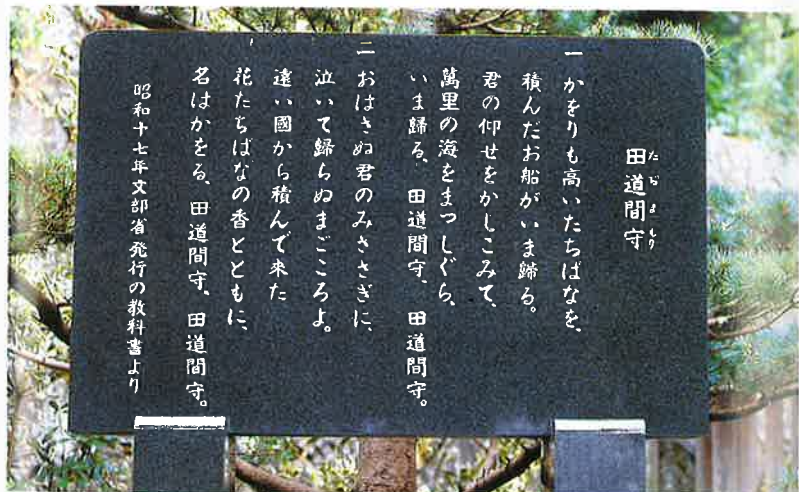
田道間守公肖像



由緒略記

創立年代は不明であるが、西暦二一五八年、白河法皇熊野行幸の折、法皇が御社で通夜なさり、「橘の本に一夜のかりねして入佐の山の月を見るかな」と詠まれたという史実があり、『後鳥羽院熊野御幸記』にも当神社に関する具体的な記述がみられる。

当神社は、このような由緒ある古社として、郷土のみならず、遠く九州地方からも崇敬者を集めていた。その確かな証しとして、いまでも神社には「紀国橘本王子造宮大願主日向国江田住僧実典大工三路正吉 永亨九年二月二十二日」(一四三七年)という棟札が残る。造宮願主が、その昔、日向の橘の小戸の阿波岐原(椋



昭和17年国民学校の教科書に掲載された『田道間守の歌』を刻んだ歌碑。

みかん発祥の地「六本樹の丘」

大正五年三月、田道間守公の

遺功を称え建立する。それには

「田道間守公遺蹟六本樹之丘」とある。



原)と呼ばれた江田村(椋原神社鎮座地)の人であったことには、深い謂われがあるにちがいない。

迎えて貞亨四年(一六八七年)、藩主徳川光貞卿が葺繕を行ったという事実は、何よりも、当神社の御威光と格式の高さを物語ることであった。

しかし、いつしか神社は廃頽し、ただ祠ひとつと橘の老木(株周囲三三、高さ六尺、枝張り十二余尺)が残存するのみとなった。

これを嘆き、その再建に東奔西走したのが、里人の前山虎之助である。

氏の尽力により、神社は、明治二十八年、山階宮晃親王殿下が、菓祖田道間守公の遺徳を称え、「偉哉田道之績」の大文字を下されるまでに復興

し、明治四十年三月には、ついに『神社明細帳』に登録されるようになった。

同年十一月三日、入佐山麓の熊野古道、所坂王子社跡に社殿を建立、「六本樹の丘」より遷座。これが造営以前の社殿である。

明治四十二年、陽明学の権威者袖岡倉田績翁撰文の「田道間守遺功之碑」が完成する。この碑を、「偉哉田道之績」の大文字とともに、「六本樹の丘」

の上にある岩屋山に建て、橘祖であり、菓祖であり、広く文化の神であられる祭神、田道間守公の遺功を不朽に語り伝えることとなった。

その後百年、昭和三十六年には、地元を始め、全国の柑橘・果物・菓子業者の浄財を得て、御神殿の改築を行い、現在に至る。

四月三日 春祭・菓子祭・全国銘菓奉献祭

田道間守公と橘本神社

『記紀』によれば、第十一代垂仁天皇は、農業の発展と殖産の開発に尽くされ、田道間守公に命じて不老長寿の靈菓をお求めになった。公は常世国

(中国)に渡り、十余年の辛苦のすえ、非時香菓すなわち「橘」を持ち帰

るが、前年、天皇はすでに崩御されていた。公は、落胆悲涙し、その陵に

橘を捧げて命絶えたという(西暦七十一年)。その橘が日本で最初に移植さ

れたのが、当神社の旧社地、「六本樹の丘」である。

かつて田道間守公は、国民学校の教科書を彩る人物であった。公は新羅

国天日槍の子孫であり、橘を初めとして、広く先進国の文化を持ち帰った

ものと推測される。橘はその後、改良に改良を加えられ、今や優秀なるミ

カンとして全国各地に栽植され、万人が広く、その恵みを受けている現状

である。

橘の歴史は古い。『万葉集』には「橘は実さえ花さえその葉さえ枝に霜降れど弥常葉の樹」の一句があり、元明天皇は、「橘は菓子の上にして人の好む所なり。枝は霜雪を凌ぎて繁茂し、葉は寒暑を経て凋まず。珠玉と共に光を競い、金銀と交え愈々美なり」となされた。また、桓武天皇の京都



明治二十八年、山階宮晃親王殿下より「偉哉田道之績」の御染筆を賜わり、明治四十二年、六本樹の丘上の岩屋山の境内に碑を建立する。



南方熊楠翁の短冊

「さつきまつ花橘の 大正十一年三月八日

たよりか那」 前山君来訪橘本王子社

再興の事承はりて

熊楠

さつきまつ花橘の
たよりか那
前山君来訪橘本王子社
再興の事承はりて
熊楠

遷都の際、橘は「左近の桜」と相対し、紫宸殿の階前に、いわゆる「右近の橘」として植えられ、栄え行く文化の象徴とされた。そして、昭和十二年、文化勲章の制定に当たり、その意匠に橘が採用されたのは、橘こそ文化の象徴であるとの聖旨によるものと聞く。

「さつき待つ花橘の香をかげば昔の人の袖の香ぞする」と古歌に詠まれた橘は、故人を想うにつけ、先進を慕うにつけ、またとないよすがとなる。いま一度、香気漂うミカンの本場加茂の里を訪れて、日本文化の祖であり、橘の祖である田道間守公の遺徳を偲び、同時に、未来に向けて清新の気を養うことは、誠に意義深いことであろう。

菓子と田道間守公



橘の花

辞書は「菓は果」とし、ともに「コノミ」と読む。

上代の菓子とは「古能美」または「久多毛能」であった。

『日本書紀』の一書に「菓時以菓祭之」とあるとおり、草木の果実そのままを供饌または間食としたのである。また『書紀』には、「橘は菓子の長上にして人の好む所なり」とある。すなわち、上代の書にいう「菓子」とは、後世の「水菓子」、つまり果物のことであった。

しかし、平安時代になると、今流の菓子の製造方法が考えだされ、果汁などを用いるようになったらしい。『菜花物語』には「さまざまのくだものを皆物の形に造りなどして」と書かれ、伊勢貞丈の『貞丈雑記』にも、菓子のことが種々記されている。その後、この菓子の製法が、生活の向上とともに着実に発達し、精巧を極めるに至ったことはいうまでもない。ただ、砂糖の製法や利用法が進歩し、菓子の種類が多様化した現在も、製菓に果汁を必要とするものが相当数あるということは、歴史的にみて、実に興味深い。

このように、「菓子」なる語は「果物」に由来する。そして、その果物の頂点に立つ「橘」を遠く海外から輸入したのが、他ならぬ田道間守公であった。

広く菓業に従事し、その発展に力を注がれている諸賢にあられては、菓祖、田道間守公を追慕し、報本反始の誠を尽くされ、ますますの隆昌を祈念されるべきであろう。